

二〇二五年度
教育発達学科

小論文

〔自己推薦AO(A)〕

14-02

注意

- 一. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
- 二. 解答はすべて解答用紙の決められた箇所に入記してください。

問題 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

ギネス世界記録によると、アガサ・クリステイは史上最高の20億冊以上の売り上げを誇るベストセラー作家だという。しかも、世界で最も翻訳されている作家であり、彼女の作品は44カ国語による7236もの翻訳版が存在するという。処女作発表からほぼ1世紀経過した現在においても、彼女の実績をしのぐミステリー作家は、未だに現れていないといっても過言ではなからう。

彼女は「欺^{だま}しの天才」と呼ばれた。

アガサ・クリステイはいわば代数の応用問題をつくる。思いちがい^いをさそう設問の内容をよく整理して、方程式の解をもとめなさいというのである。話の大詰めまでにはよい枝葉がすべて払われて、のこるは殺人の動機と犯人の名前だけになっている。解決への道筋は複雑すぎて迷うばかりだったが、だしぬけにばかばかしいほど単純な方向がしめされる。その効果は芸術の持つ浄化^{カタルシス}作用といつていい。(フランシス・ウィンダム『ロンドン・サンデータイムズ』)

「興味がなぜかきたてられ、自ずとエンゲージメント状態に至るのか」という問いに対する答えがここに隠されている。文章の魅力に関する研究によると、驚きや意外性、ハラハラドキドキするような予想外の展開といった特徴が読者の興味を惹くことがわかっている。すべての手がかりが提示されているにもかかわらず、巧妙に読者の目をくらませて裏をかき、まるで手品のように結末で読者をあつといわせる。まさに「欺^{だま}しの天才」クリステイの小説作法は、理に適^{かな}っているのだ。

ミステリーは読者の思考を活性化する。誰が犯人かといったメインの謎のみならず、動機は何か、誰にアリバイがあるのか、証拠や手がかりは何かといった多種多様な謎が作者によって巧妙にちりばめられている。読者は多岐にわたる疑問と向き合い、あれこれと推測しながら、気づいたことをつなぎ合わせて答えを導こうとする。ミステリーが読者と作者の勝負といわれる所以である。そのような思考プロセス自体が読者の楽しみであるのはもちろん、見事に背負い投げをくらう「どん^A

でん返し」が見事であればあるほど、それもまた快感なのだ。

優れたミステリーは状態興味を高めるだけではない。モチベーションという観点から重要なポイントは、推理やどんでん返しのプロセスに心理学的なメカニズムが潜んでいるという点だろう。

問いに向き合って答えを探ろうとする思考プロセスは、もちろんミステリーの専売特許ではない。われわれは日常の様々な場面で、意外なことに直面して「おやつ?」「どういうことかな?」というように、「何気ない興味」を抱いて対象に注意を向ける。それが「真剣な興味」へと発展すると、その疑問を解決するために情報を集め、それらをつなぎ合わせて、あらためて理解し直したり、新たな考えに至ったりする。

このような認識プロセスの背後にあるモチベーションは認知的動機づけと呼ばれ、知的好奇心に関する一連の知見がこれまでに蓄積されてきた。キーワードはズレである。

人には、情報を体系化して理解しようとする学習システムが生まれつき備わっている。

そのおかげで、日常的に活用している「既有的認識枠組み」(認知標準)と、環境から受け取る「新しい情報」とのズレ(不一致)が感知され、そのズレを解消しようとする自生的なプロセスを通じて学習が生じる。

図1の図形を見てほしい。何角形だろうか。もちろん、われわれは四角形が答えだと知っているが、大人でも一瞬迷う人がいるかもしれない。実のところ、三角形と答える小学生が多いのだが、その気持ちはわかるはずだ。彼らは図形の大まかな輪郭によって三角形と判断するわけだ。

そこで彼らに「四角形が正解」と伝えたと、「えっ? 何で?」と驚く。その新しい情報とすでに持っていた認知標準にズレが生じたからである。にわか知的好奇心が彼らに生じて、三角形と四角形の違いに関心が向けられ、辺や角の数によって図形が定義されるということ学ぶことになる。認知的動機づけによって学習が効果的になるという一例

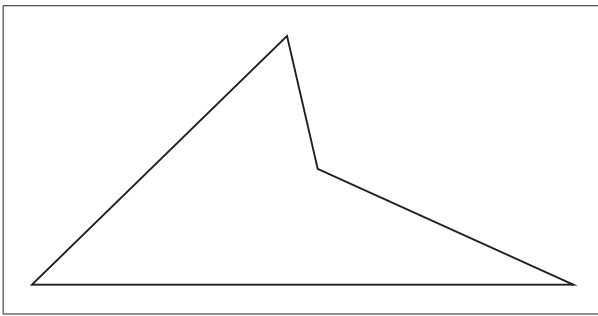


図1 何角形?

だ。われわれにはこのような認知・学習システムが備わっているのである。

認知的動機づけの研究は、知的好奇心を「拡散的好奇心―特殊的好奇心」および「知覚的好奇心―認識的好奇心」という二次元に分類することで理論化が進んだ。

まず、知的好奇心には、ズレを求めるプロセスとズレを低減するプロセスがある。人がわずかな刺激しか経験していないとき、適度の刺激を求めて行為を起こすはたらきが**拡散的好奇心**である。感覚遮断の研究を思い出してほしい。刺激がまったくない環境に耐えられないのは、われわれが**拡散的好奇心**というシステムを生まれながらに持っているからだといえる。

これに対して、ズレを低減する方向で行為が起こるプロセスは**特殊的好奇心**と呼ばれている。しかも、ズレがあればよいというものではなく、そこには最適の程度があることもわかっている。ズレが小さすぎると刺激に接近しないし、大きすぎると刺激を回避するというのである。

たとえば、一般にどんな映画やドラマが好まれるだろうか。あまりにグロテスクで度肝を抜かれるような設定のホラー映画は、強烈な恐怖や嫌悪感を生じさせるために避けられるだろうが、逆にわれわれの日常生活と大差ない映像をドラドラと見せられても退屈だけである。人気があるのは、日々の生活感覚と適度にズレがある映像ストーリーなのだ。

また、ズレを感知すると、新奇性、複雑さ、あいまいさ、驚きといった感覚がわれわれに生じ、もっと知りたくなった^Bり、さらに調べたくなったりする気持ち^Bが自ずと生まれてくる。人は常に情報を探索し、モニターするアンテナをはたらかせつつ、いざ特定の内容に焦点を定めたなら、そのテーマについてより深く理解しようと努力するのである。そのプロセスは、特定の対象に向けられる注意の喚起や持続に関する**知覚的好奇心**と、理解プロセスに関わる**認識的好奇心**の2つに区別される。あるものごとに対して「おや!？」と感じて、関心を向けるはたらきが前者であり、「何かな?」「なぜかな?」といった疑問を抱きつつ認識を深めていくはたらきが後者である。図1を三角形だと思い込んでいた小学生が実は四角形だと学習するプロセスは、まさにこれら2つが連携したはたらきによるものである。

(鹿毛雅治『モチベーションの心理学「やる気」と「意欲」のメカニズム』中央公論新社 二〇二二年 ※一部改変あり)

問一 傍線部A「『どんでん返し』が見事であればあるほど、それもまた快感なのだ。」と書かれているが、これはどのようなことを意味しているか。本文の内容を踏まえて、二五〇字以上三〇〇字以内で説明しなさい。ただし、ズレという言葉を用いること。

問二 傍線部B「そのテーマについてより深く理解しようと努力する」プロセスについて、本文の内容を踏まえて、自分の経験と関係づけながら六〇〇字以上七〇〇字以内で説明しなさい。